



イエスは自らの死を予測し、弟子たちと最後の晩餐をする。そのとき居合せた者を後に12使徒と言う。

(初代ローマ法王)シモン・ペテロ/(その弟)アンデレ/(ゼベダイの子) (大)ヤコブ/(福音記者・黙示録の)ヨハネ/フィリポ(ピリポ)/バルトロマイ/トマス/(福音書の)マタイ/(アルファイの子) (小)ヤコブ/タダイ/(熱心党の)シモン/(イスカリオテの)ユダ⇒後にマティアに入れ替える。

(ゼベダイの子)聖ヤコブは使徒最後の殉教者として、ヘロデ・アグリッパ1世によって処刑される(AD44)。遺骨は長らく行方不明になっていたが、9世紀になってスペインのガリシア地方で奇跡が起こった。その地方の羊飼いがある夜、星に導かれて偶然にヤコブの遺骨を発見したのだ。そのことが縁でヤコブはスペインの守護神サンチャゴ(聖ヤコブの意味)となる。またこの地はカンポ・デ・エストレーリア(星降る野原)と呼ばれていたが、いつかなまってコンポステーラとなったものだ。人々はこの地に聖堂を建設し、サンチャゴを厚く祀った。

↑家並みの向こうにそびえる聖ヤコブ大聖堂/ サン・マルティン修道院↑

周辺の街路に面する建物は屋根勾配や色彩が、規制するでもなく自主的に統一されているので街並みが映える。こんな貧しい町でも、電柱も看板も一切ないから美しいのだ。教会の高さを超える建物を一切建てないのはここだけではなくヨーロッパのどこの街でもそうである。だから教会を軸に街に求心力がある。カソリック4大聖地の一つとされているのでヨーロッパ中から信者が集まる(ちなみに他の3か所とは、エルサレム、パチカンとフランス南部ピレネー山脈の麓の村ルド=聖母マリアが村の子供の前に現れる奇跡が起きた)。嘗ては巡礼者は徒歩でやってきた(現在でも徒歩の人は多い。道標の目印はホタテ貝だが、自分の荷物にもこのマークをどこかに付けて歩くのが風習となっている。ヤコブのシンボルなのだ。お遍路さんのキリスト教版だと思えばよい)。しかし何せピレネー山脈を越えて、イベリア半島北西の端にあるまちだからとても遠い。着の身着のままで何カ月も風呂にも入らない。こうした苦労の末によりやくたどり着いた大群衆で教会は埋め尽くされる。湿気が少ないとは言うものの大聖堂に満ちた巡礼者の汗と埃のにおいはすごい。そこでそれを消すために、教会では巨大な壺に香料をたいて、天井からブランコのように振り回す。ボタフメイロ (botafumeiro スペイン北部ガリシア地方の言葉で香料坪の意味) というが、現在でも結婚式などの儀式では行われている。右の写真はある日の婚礼のシーンである。お祈りの後、3人がかりでこの壺をゆする。なかなか壮観で楽しい。金額は教えてくれなかったが、それほどではないらしい。庶民でも手の届く料金のようなだ。



大聖堂内部 中央に下がっているのが香を入れたボタフメイロ↑

[伽藍と政治] **世界最大の木造建築** 奈良 東大寺 大仏殿

東大寺大仏殿の正面。右手前に見えるのが手水屋。ここで手を清める↑

で焼け落ち、このときは大仏の首まで失う被害を被った。その後は戦乱続きで大仏の頭部を銅板で仮復旧した程度で長らく放置され続けた。再建は1709年5代将軍徳川綱吉の寄進による。建物の奥行50.5m、棟高49.1mは当初と同じだが東西の横幅は天平時代当初の規模には至らず、86mが57.5mに縮小されて現在に残る。

伽藍が立ち並ぶ中で、一際有名なのが二月堂である。早春の風物詩「お水取り＝修二会しゅにえ」で善男善女が松明(たいまつ)の火の子を浴びようと本堂手前の土手に立ち並ぶ。写真の左にわずかに見える階段の渡り廊下から精進潔斎した僧侶の練行衆が登る。その道明りとして儀式の下働きをする童子(と言っても子供ではない。立派な大人だ)が大松明を抱えて先導する。やがて正面の舞台(欄干・バルコニー)に至ると松明が掛け走り、はぜた火の子が大量に降り落ちるのは豪壮な眺めだ。しかし昼間見ても危なそうな、段とも言えない土手に人がぎっしりと埋まる。暗闇でよく怪我人が出ないものだ。二月堂と手前の広場。おぼつかない斜面だ⇒



お水取りに使う水を「閻加水あかみず」と言うが、汲み上げる井戸の水は実は遠く若狭から運ばれてくるのだとの伝説がある。その謂れはこうだ。その昔、二月堂が全国の神々を招いたところ、若狭の遠敷(おにゅう)明神が漁に忙しくて遅刻した。明神は申し訳ないと二月堂本尊の十一面観音に、お詫びのしるしに以後修二会に使うお水を私が送り続けると約束した。福井県小浜市にある若狭彦神社(彦火火出見尊ひこほほのみこと＝山幸彦＝神武天皇のおじいさんに当たる)と若狭姫神社(妻の豊玉姫)がそれで、今日まで欠かさず「お水送り」の儀式を実際に行っている。夜間に白装束で行う儀式が、だんだん知れ渡るようになって観光名物となってきた。現実の地下水脈で繋がっているはずはないのだが、そう信じるのが神と仏の道に通じるのかと思うと楽しい。

日本最古の木造建築と言えば法隆寺(伝607:推古天皇と聖徳太子による)だが、最大のものと言えば東大寺大仏殿だ。聖武天皇の発願で745年に大仏(盧舎那仏)の鑄造を開始し752年に開眼供養を行った後、758年に大仏殿の建立を見た。華嚴宗の大本山で開祖は良弁僧正。正確には軸組み構造としては今日でも世界最大である。

この建物のご難続きで、2度建て替えられた。1度目は1181年平重衡の南都の焼き打ちで焼失し1190年に源頼朝が再建した。2度目は1567年に松永久秀らと三好三人衆らの東大寺大仏殿の戦い